

茨城県大子町と「地域と教育」研究会の連携活動報告

近藤 雄介*
佐々木 美佳**
藤田 悠佑***
田崎 智也****

1. 佐原地区 花室神社春季例大祭

1-1. 概要

平成26年4月5-6日に大子町佐原地区で執り行われた、花室神社春季例大祭に参加した。これは筑波大学と大子町の連携協定に基づき、大学企画室が中心となって企画されたものである。全学に周知されたため、多くの留学生を含む十数名の学生が企画に参加し、前泊を含む2泊3日の日程を楽しんだ。宿泊は、いくつかのグループに分かれて、地元の民家に宿泊させていただいた。

1-2. 内容と感想

佐原地区では人口の減少が深刻な課題となっており、今回学生に呼び声がかかったのも、祭の担い手を募る目的があったようであった。本来は毎年行われ、活気を呈していた例大祭であったが、祭の担い手の減少・高齢化とともに、運営に対する負担感が増していき、今では5年に一度の開催となっているようである。

だが実際に本番を迎えてみると、普段の地区の様子からは考えられないような人々が集まり、

茨城県大子町
花室神社春季例大祭
参加者募集

祭りのサポートを通じ、伝統的な地域文化に触れてみませんか？

日程：4月4日(金) 前泊(午後、筑波大学発、民泊)
4月5日(土) 本番(民泊)
4月6日(日) 本番(夕方、筑波大学発)

募集人数：学生約20名程度(山車2台、1台につき10名)

内容：山車の引き手が主な役割。他、さほら小児遊、大子西中生徒との交流。

保険：全費加入の傷害保険で対応

交通手段：大子町公用バス(筑波大学発着)

宿泊：地元の民家に宿泊(無料)

食事：滞在期間中、全て地域で支給(無料)

大子町教育委員会 学校教育課
Tel: 0295-79-0170
〒319-3551 茨城県久慈郡大子町大字池田 2669

<申込先> 筑波大学企画室/人間系 上田孝典研究室
ut.sqj@un.tsukuba.ac.jp
Tel: 029-853-2052,2767

図1-1. 募集チラシ

* 筑波大学人間学群教育学類4年
** 筑波大学人間学群教育学類4年
*** 筑波大学人間学群教育学類3年
**** 筑波大学人間学群教育学類2年

晴れ渡る青空のもと、終始賑やかに行われた。

近隣の小中学生の参加こそ多くはなかったように見えたが、これまでの活動から顔なじみの少年は母親の隣で祭囃子を奏でており、祭の担い手が確実に継承されている様子も確認することができた。

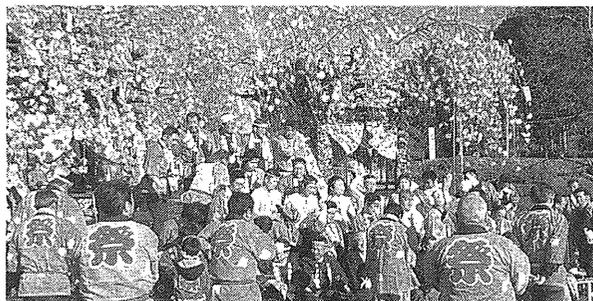


写真 1-1. 出発前の朝

民泊でお世話になったご家族にこの話題についてお聞きすると、祭になると人が地区に戻ってくる、ということがあった。祭があれば帰省する大義名分となるし、祭の運営を通して地区内の繋がりを再確認することができる。祭の後に語られた、「やってみると、毎年やってもいいかなと思う」という言葉は印象的であった。

例大祭は、山車の車輪が故障してしまい、道路で立ち往生してしまうというハプニングもあったが、2本の山車は地区内を巡行し、神具も神社に無事奉納された。

後日、地区の方とお話をする機会があり、例大祭のことも話題となった。そこでは、地区の祭に外部の者を参加させるということに対しての葛藤があったという。今回の例大祭の参加は、地区の方々の多大なご厚意をうけてのものだったのだと実感することができた。

祭に参加した少年の1人は、シンガポールからの留学生に興味津々であった。中国からの留学生は学生で唯一、山車の上に乗る、その後の宴会で人気者となっていた。普段では決して交わることのない2つの文化が触れ合うことになったのも、このような機会があったからである。

これまで、例大祭は地域内の繋がりの結節点であったが、今回は外部との新たな交流の場となった。そのどちらの方がいいということにはできないが、5年後もお祭りのもとに人々が集まることに期待したい。

(近藤雄介)

2. 夏「夢道場」―道の駅での野菜販売活動

2-1. 活動概要

「夢道場」とは、さはら小学校で毎年継続的に行っている農作物の栽培、販売を行う体験活動である。学生は、道の駅で実施された野菜販売と、その前日準備に参加した。

7月25日(金) さはら小学校

野菜販売準備

7月26日(土) さはら小学校、道の駅

2-2. 内容

25日の前日準備では1～3年生がポスター、チラシ、レシピの色塗り、4～6年生が野菜の選別、値段の決定、袋詰めなどの作業を進めていた。「夢道場」は社長、生産部長、販売部長、技術部長を中心とした社員（4～6年生）によって構成される「さはらファミリー会社」により運営されている。高学年の生徒は低学年の生徒に作業の指示出しをしていた。わたしたち学生は、生徒たちの輪の中に入って一緒に作業をしたり、周囲とあまり接触しない生徒に対してアプローチをしたり、各々がそれぞれの関わり方をしていた。前日準備が完了した後は屋外プールが開放された。

26日の販売当日はさはら小学校に集合した。保護者の方々も手伝いに集まっていた。キュウリなどの野菜を朝摘みし、選別、袋詰め、値段シール貼りを行った。準備が整った後道の駅に車で移動し、11時に野菜販売を開始した。高学年の生徒が中心となって販売所で会計と商品の受け渡しを行い、その他の生徒がチラシを配りながら道の駅の利用者に対して呼び込みを行った。枝豆や、生徒たちのアイデアによるセット販売野菜は、販売を始めてからほどなくして売り切れた。一方でジャガイモなどは家に蓄えがある家庭が多いということで、売るのに苦労していた。ジャガイモの売れ残りが目立ってきたからは、呼び込みの生徒たちも袋詰めされたジャガイモを手に持ちながら道の駅利用者に声を掛けていた。生徒たちの努力と、遅れて来られたさはら小学校前校長先生の購入などによって、販売開始から約1時間後にすべての商品を無事完売することができた。日照りが強い猛暑日であったので、誰もがかなり体力を消耗した様子であったが、完売を知らせる連絡が流れると、明るい喜びの声が上がった。

2-3. 感想・考察

筆者は平成24年度の「夢道場」野菜販売にも参加しており、今回は2年ぶり2回目の参加であった。2年前にはなかった新しい試みがいくつか見受けられた。例えば当日早くに完売した野菜のセット販売は、前回は用意されていなかった。「天ぶらセット」という商品は、ナス、インゲン豆、ししとう、青葉が、生徒たちが自ら編んだ籠の中に入れて販売されていた（他にも「煮物セット」「カレーセット」など）。セット販売は生徒が考えたアイデアから実現したという。セット商品を買えば数種類の野菜をひとつの料理に使うことができるし、献立の提案にもなる。手作りの籠も付いており、かつ値段も300円、350円と安いので購買欲が引き立てられる。筆者も購入し、帰宅後に料理して美味しくいただいた。また、星型・ハート型キュウリも今年からの企画として挙げられる。成長の途中で特別な器具を装着したキュウリは、断面が星形やハート型になるのだと生徒たちが学生に教えてくれた。器具は、寺院の住職であり教育委員である出村さんから寄贈されたものである¹。

「夢道場」の内容は上記のように発展しているが、それ以上に大きな成長を見せてくれたのはやはり、さはら小学校の生徒たちである。2年前、上級生の指示に従っていたある生徒は、外見的にも内面的にも大きく成長していて、収穫時には重い台車を引きながら下級生に指示を出していた。1年生だった女の子は3年生になっており、先生から許可をいただいてプール見学をしていた筆者と一緒に遊んでくれた。筆者自身の小学生時代を思い返してみると、プールの自由時間中に誰と遊ぶかというのは、仲良しグループの確認を行うための緊張の時間でもあった。その記憶と照らし合わせると、2年ぶりにやって来た大学生と2人で遊んでくれることを嬉しく、ありがたく感じると同時に、学校において彼女を取り巻く人間関係の穏やかさをうらやましく思った。一方で、平成26年度1年生のクラスには女の子が1人しかいない。さはら小学校は学年の枠を超えた活動が多いものの、学年で唯一の女子であることを心細く思うこともおそらくあるだろう。

おわりに、「夢道場」と直売所の連携を提案する。例年「夢道場」では道の駅常設の野菜直売所と隣り合って野菜販売を行っているのだが、野菜直売所の方と生徒たちが関わり合う機会が設けられれば良いのではと考える。野菜販売についてのアドバイスをいただくことができ、また年に一度の販売会と、直売所での日々の販売との間にある様々な差異を見出すことができるだろう。

(佐々木美佳)

3. さはら小学校「親子ふれあいの集い」・佐原地区産業文化祭

3-1. 活動概要

11月1日のさはら小学校「親子ふれあいの集い」、2日の佐原地区産業文化祭に参加した。

「親子ふれあいの集い」は、さはら小学校で行われ、「おもしろ理科実験教室」、「合奏発表」、「餅つき」の3部を通じ、児童とその保護者のふれあいの場を作ろうという試みである。今回学生は「餅つき」から参加した。「餅つき」は、児童が育てた米をかまどで蒸し、児童と保護者、教職員が一緒についた餅を、お母さん方がのり餅、きなこ餅、納豆餅の3種類をつくって食べるというものである。餅つき自体は低学年、中学年、高学年と分かれて行われるが、食べるときは違う学年、保護者も交じって席についていた。

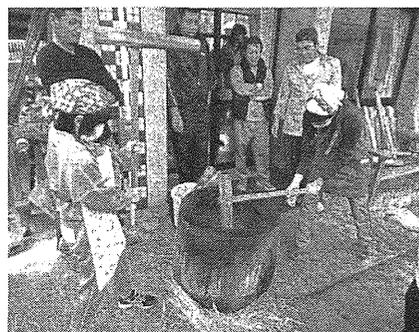


写真 3-1. 餅つき

佐原地区産業文化祭は今年で第30回を数え、佐原地区の人々が出店を構えたり、収穫した野菜を販売したり、よさこいソーラン節などの踊りの発表をしたりと言った、地区の文化・産業

を振興するためのお祭りである。上述のさはら小学校「夢道場」も出店し、野菜を販売している。今回学生は、出店で販売を手伝った。

3-2. 感想・考察

餅つき大会はどんよりとした曇り空の下で行われたが、子どもたちと大人たちの活気で満ちていた。小学校低学年は一人で杵を持つのもやっとで、周りの大人に支えられながら餅をつき、高学年になるにつれてしっかりと杵を振り下ろしている様子は、子どもたちの成長の様子を感じさせる。一方で大人たちがすごい速さで杵を振る様子を子どもたちは食い入るように見ていた。また、子どもたちが親や先生と一緒に餅をつく姿は、見ていてとても微笑ましかった。

このような、普段とは違う親や先生の姿を子どもたちが見ることのできる場はとても貴重だろう。子どもたちは大人たちの新たな側面を知ること、大人たちを捉え直し、自己の理想の大人像を構築していくはずだ。お父さんのようにたくましくなりたい、お母さんのように子



写真 3-2. よさこいソーラン節

どもたちにお餅を作ってあげたい、と思う子どもたちは、将来またこの文化を受け継いでいこう。大人たちにとっても、勉強だけでは見えない子どもたちの成長を知ることができる。一人で杵を振りおろせるようになった、上級生として下級生の面倒を見てあげている。そういった子どもたちの成長も垣間見ることができる。本企画のような、非日常的な場における親子や、児童と先生のふれあいの重要性を感じることができた。

産業文化祭では、地域の方々と共に出店で販売を行った。私がお手伝いした出店は、地域の方々の手作りのパンやケーキなどを販売しており、他にも焼き魚や焼きそば、お焼などを販売している出店で学生はお手伝いさせていただいた。産業文化祭中のよさこいソーラン節や茶の里音頭では多くの小学生とその保護者らが一緒に踊っていた。小学校を卒業した中学生も後ろの方で数人踊っており、踊りを通じた世代間の交流や、中学生がかつての自分達を重ね合わせる、といった意味合いも感じられた。

他にも、前日の餅つきで一緒だった小学生との交流や、スリッパ飛ばし大会、大抽選会など、地域の人々の温かさに触れながら、一日交流することができた。じっくりとお話を聞くというような場ではなかったが、地域の人々と同じ場を共有し、ともに働き、ともに笑うという経験はとても貴重であり、今後も大子町と我々学生が連携していくためには、このような交流がとても重要であると感じた。

(藤田悠佑)

4. 「みんなの楽校」プロジェクト

4-1. 目的及び活動概要

当プロジェクトは、大子町在住の高齢者の方々を対象に「人生」をテーマとした聞き取り調査を行い、その内容を学生が冊子にまとめて贈呈することで、高齢者の方々の生きがいや自己肯定につなげると同時に、学生の学びの機会とすることを目指して活動を行った。また、冊子を通して個人の経験を地域の財産へ変換することも視野に入れた。当プロジェクトは「地域と教育」研究会の自主事業でもあり、企画立案から実施まで学生の裁量に依るところが大きかった。そのため、当初は方針や方法がまとまらないこともあったが、主目的が変わることはなく、一貫した意識をもって調査へと臨めた。

4-2. 内容及び方法

実際に大子町を訪れて調査を行う前に、1月8日（木）、2月3日（火）、2月6日（金）の3日間で大子町出身の学生による事前学習会や聞き取り調査に関する勉強会を行い、円滑に聞き取りを行うことができるように準備を行った。そして、表4-1に示した日程・調査者で話者のもとへと赴き、聞き取りを行った。

表4-1. 「みんなの学校」プロジェクトの調査日程及び調査者

調査日程	調査者
2月9日（月）	橋田 慈子 近藤 雄介 横江 祐二
2月10日（火）	橋田 慈子 横江 祐二 近藤 雄介 佐々木 美佳
2月18日（水）	大金 祐介 近藤 雄介 長谷川 沙希 源河 章乃
2月19日（木）	大金 祐介 平木 貴大 伊藤 昂大 藤田 悠佑
2月26日（木）	南角 建人 近藤 雄介 田崎 智也

話者1名に対して学生2～3人がつき、1～2時間の聞き取りを行った。構造化した聞き取りではなく、話者が自らの人生経験を生き生きと語ることができるように、そして、話者が語りたくないことを書き留めていくことができるように、お互いがリラックスした環境で非構造化された聞き取りになるように心掛けた。調査のテーマは「人生」や「個人の歴史」であった為、話者の語りたくないことに無理には触れず、話者の経歴や大子町での出来事、時代背景などを手がかりにして1つ1つのエピソードを深く掘り下げることを意識した聞き取りを行っていた。記録については、調査者の筆記による記録だけでなく、話者の了解のもと、ビデオカメラによる撮影とボイスレコーダーによる録音も行った。また、最終的には調査の成果物として聞き取

った内容を冊子にまとめ、話者、関係者や地域へと配布する。

4-3. 感想及び考察

私自身、大子町における活動に参加するのが初めてだったので、どれだけしっかり準備を重ねていたとしても、不安を抱えた状態でのスタートであった。しかし、実際に調査を始めると、大子町にお住まいの方々の人当たりの良さとも言うべきであろうか、穏やかな気性を感じることができ、リラックスした状態で調査に臨むことができたように感じる。特に、今回の調査に協力して下さった方々は、人生経験が豊富なおかげからか、特に動じた様子もなく快く聞き取りに協力して下さったように感じた。

昨年度の「みんなの楽校」プロジェクトでは、大子町中学校生徒の学力向上を主目的とし、学生と子ども達が直接的に関わることができる「寺子屋」による学習支援・進路指導と、中学生を含めた大子町の多くの方々に上岡小学校の魅力を実感してもらうための「ショートフィルムを作ろう」という2つの企画が行われた。そして、今年度の企画内容はこれらとはまた違った視点から大子町という地域に学生が主体となって関わっていく活動目的及び内容になったのではないだろうか。我々大学生は、一般的に社会教育を担当し、継続的な環境の向上を図る行政の立場とは異なり、より当事者意識が強い反面、一回性が強いものになりやすい。その為、「地域と教育」研究室として継続的に大子町に関わって行くことができているのは、このように新しい視点を提示することを欠かしていないことが一因として考えられる。今後も継続的に関わって行く中で、定例的な活動に参加して信頼関係を構築していくことと、馴化しないように新たな視点を提示し続けることの両者が重要になってくるのではないだろうか。

最後に、当プロジェクトが大学生の自主性に依る部分が多いからということもあるだろうが、活動を終えてみると、より良くなるための向上策が見えてくるものだと感じた。例えば、最終的に冊子を配ることによって地域に調査内容を還元するという自体に問題はないが、大子町の子ども達と一緒に聞き取りを行ってみるなど、新たな視点が得られた。学生主体であり、外部からやってくる人間である以上、活動にも一定の限界があることは間違いない。しかし、だからといって向上心を忘れて良い訳ではなく、次年度以降へと活かしていく形で、今年度の活動を真摯に受け止めていきたいと感じた。

(田崎智也)

¹大子町教育ポータルサイト—大子町立さはら小学校「2014/07/23 ☆のきゅうり」
<http://www.daigo.ed.jp/sahara-syo/> (最終アクセス 2015年3月29日)